

# 志文

おまんが好きぜよ!



Fumi Nakata

中田 文

# 恋文

おまんが好きぜよ!

Fumi Nakata

中田 文



文芸社



3兄弟の小学校、保育園時代  
(昭和52年、名野川)



主人の卒業式の日  
(昭和44年、東京北区  
滝野川にて)



全日本少年武道錬成大会(柔道の部)団体優勝。前列右が長男(昭和58年、日本武道館)



4男登場。これでフルメンバー（昭和59年、高知県警朝倉官舎）



家族揃って全日本ビデオコンテスト表彰式。  
“女性初の大賞受賞”（昭和60年、東京有楽町）



たっ君初めてのお造り皿鉢  
(昭和60年)



勤労感謝の日NHK特別番組に出演  
大島渚先生ありがとうございました。  
(昭和63年)



ミュージカル・ハッピーウエディング！  
たっ君のお相手は後輩の元女優さん

## 夜明け前

夜行バスを待つ高知駅。

「お母さん、永い間お世話になりました、ありがとうございます。」

実は、お願いがあるんじゃないけど……僕は、本当に楽しい子ども時代を送らせてもらった。僕も、いずれ結婚して子どもが生まれる。自分の子どもにも、同じような体験をさせてあげたい。

どんなにして、僕たちを育てたのか、『本』に書いて残して欲しい」

……長男は東京に旅立った。

気になりながら二〇年の歳月が流れ、薄暗い部屋の片隅で長男の日記帳を開いて驚いた。そこには、弟たちのこと、青春の苦悩、親の私たちのことまで……、その時々<sup>つづ</sup>の気持ち<sup>が</sup>綴られていた。

兄ちゃんにメールを送った。

「約束のオモシロ子育て実践記を書いてみようかねえ。あなたの日記を引用させて欲しいが、えいかねえ。これは、あなたの子どもたちへの生きた手引書になると思うよ。大人になると、自分の若いころ考えたことや悩んだことすら、忘れてしまうからね。その『時』に何を考え、どう生きたか……日本の混乱期を迎えた今、日本男子の魂は揺らいでいます。きつと、参考になると思いますよ」

返信メール「そういえば、書いていたような……日記帳すらすっかり忘れていた。こっ恥ずかしいけど、どうぞ」

『今、私に出来ることは何か』……過ぎ去りし日々を行ったり来たりしながら、私の記憶と兄ちゃんの記録を手練り寄せて、ビデオ作品と重ねている。

のびのびと元気に育ってくれた四人の息子たちに『家族の物語』を、ふるさと・龍馬の国から送りたいと、天からの使命のように感じて、私は奮い立った。

私の還暦を契機にパソコン・ワードに、初めての挑戦だ！

さあ、子どもたち！ あなたたちが、高知に帰る日は、いつもバルコニーに大きな日の

丸の旗が翻ひるっていたでしょう。母さんの大好きな日章旗の深い意味、分かりましたか？  
『日本魂やまとを忘れず、自分に何が出来るのか』を考える大人になって欲しい、と祈りを込めていたのです。故郷には、あなたたちの大好きな坂本龍馬が待っています。

力を蓄え、いつの日にか高知に帰っておいで！

昭和五八年、『ぼくたちの夏休み』の作品が第六回東京ビデオフェスティバル（世界一八ヶ国プロ・アマ問わず）に、まさかの入賞を果たして、わが家の生活は一変しましたね。ビデオと共に大きくなった子どもたち。ウチの『めだかたち』が、どうやって大きくなったいったのか……小さな、小さな家族の『出会い』と『感謝』と『命の絆』の物語です。

『たっ君は店長さん』『ぼくの勉強部屋』『わが家の塾騒動』『ぼくは忘れない』等の作品は、時を超えて、いつの日か、あなたたちの心に甦よみがえることでしょう。

人生は、あなたが主演のドラマです。

シナリオも監督も主演も編集もあなたたち。『感動の名作』を作ってください。

私は、あなたたちのドラマの大河の水面に、キラリと光るお陽さまでありたいと思っています。

優しく温かく遠くから、いつまでもあなたたちを照らしていたい。

『みんなのおかげで、毎日が笑顔でいっぱいでした。沢山の夢と感動をありがとう！』  
素直で単純、明快。おかげさまの心で、自由に生きた私は、我が人生に悔いなしと宣言  
します。

私の子どもとして生まれてくれた息子たちに、「おまんが好きぜよ！」の思いを込めて『恋  
文』を送ります。

さあ、あなたたちが、なぜ、どのようにして生まれたのか？

第1章からドラマの始まりです！

目次

夜明け前 1

第1章 ドラマの始まりです

出会い・一四歳の夏休み 14

筆山の思い出 17

二人の高校時代 22

別れの日 28

ルビーの指輪 33

結婚までの大騒動 39

学生結婚 43

月一の来客・N氏 53

都落ち? 56

私たちのお城 59

初めての出産 61

第2章 翼を広げて

第二の故郷・中村 68

家族会議 71

ビデオカメラ登場！ 73

ちびっ子三四郎 76

捨てられたベッド？ 78

父母の教え 80

子どもの天分 83

家族の絆 85

がんばれ！ ど根性 89

かね・カネ・金・経済だ！ 94

第3章 風に吹かれて

『ぼくたちの夏休み』 100

時が止まった……	103
半信半疑の お客	105
東京だよ、おっ母さん！	108
父の戦争の話	111
初めての表彰式	114
夢のまた夢の世界	117
中村署外勤課のスターたち	121
第4章 わが家のドンデン返し	127
転校・子どもたちの悩み？	128
勉強に火が付く兄ちゃん	130
たっ君のブルーな日々	132
よっぴー「柔道」イヤになる	134
わが家の 大政奉還	137
鴨田柔道スポーツ少年団	141
少年柔道への道	143

勉強部屋のおお騒動 146

ふたつの大ボラ 150

第5章 たっ君は店長さん

一戸建ての家 156

新米店長の日 158

小さな心の叫び 162

たっ君、出番です！ 167

少年店長の活躍 170

チャンス到来 175

ビデオ大賞の知らせ 178

「僕は不良になったかも？」 180

第6章 夢をのせて 185

家族揃って表彰式！ 186

たっ君の金メダル 189

	即興・刺身作りの実演	192
	金メダルを囲んで	194
	♪夢のデイズニールランド	198
	夢から覚めた現実	201
	たっ君はタレントさん？	205
	『ぼくの勉強部屋』	208
	まぐれ入賞は続く！	212
	手塚治虫さんとたっ君	215
	第7章 幸せの青い鳥	
	『わが家の塾騒動』	220
	学芸高校・上海列車事故	226
	『ぼくは忘れない』	230
	人生は出逢い！	234
	遊びの天才・きよ君	236
	家族のひととき	240

子どもたちの結婚

250

第8章 出逢いと絆

257

……あれから四五年！

258

花も嵐も踏み越えて

260

勤王党・三志士像除幕！

262

〳龍馬神社〳に合掌

267

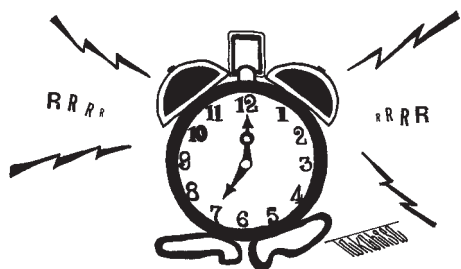
カバーイラスト 中田 優  
本文イラスト たっ君（高校一年生当時）

恋  
文

題字 竹内暮雪（土佐郎）

# 第1章

ドラマの始まりです



……「痛いー！」腰と下腹がうずき始めた。

昭和四六年四月二七日、買い物を終え、夕食の準備をするのだが……。

もう我慢の限界……古い警察官舎（高知市塩田町）の台所。

待ちに待った赤ちゃんが生まれる。もうすぐ、私はお母さんになるのだ！

この〴〵時から生まれる瞬間まで、主人との想い出が走馬灯のように浮かんできた。

## 出会い・一四歳の夏休み

彼は、高知県立小津高校二年生で、姉の同級生。私は上八川<sup>かみや</sup>中学校<sup>かわ</sup>三年生の一四歳。

夏休みに、生徒会長の彼（一九歳）と副会長の姉（一六歳）のいる高知市内の小津高校・生徒会室を私が訪れたことから、ドラマが始まる。

彼への第一印象は、（優しそうな、ごっついおじさん。〴〵校長先生〴〵みたい）



2歳当時の文（右）。生家の前で近所の子たちと。その後の水害で幼少の頃の写真はこれ一枚となった。

私への第一印象は、「これは、可愛い。ホントにサエさんの妹さん？」と姉に言ったそうなの。

その夜、下宿で姉が話した。

「会長が『妹さんに、桂浜の坂本龍馬像を見せてあげたい』言いうう（言っている）。みんなあ（生徒会執行部）で自転車に乗って、行くことになったき（から）ね」

「うわあ、嬉しい。姉ちゃん、坂本龍馬って誰？……聞いたことはあるけど」

姉から、会長のコトは度々聞いていたので

「有名人」のような憧れを抱いていたが……。

翌日曜日、小津高校の玄関広場へ集合。

男子は自転車の後ろに、それぞれ女子を乗せて出発することになった。

会長の手配よろしく、いきなり「妹さんは、ここへ乗って」私は、彼の自転車の後ろに決まった。

(ええ？ 校長先生の自転車？ かつこい男の子の自転車に乗りたかったのに)

……かなりシヨックだったことを記憶している。

桂浜は、相当遠かった(片道約一五キロ)。

彼は坂本龍馬像の前で、なにやら長い話を始めた。姉たちは、みんな真剣に聞いている。

私は退屈でたまらない。(いつまで、話すんじやろう。早う、終わらんろうか……)

記憶にあるのは、校長先生の「日本昔話」と、おいしいアイスクリンの味だけだった。

後に、中学時代のサイン帳に記された彼の「妹よ、必ずや小津に来てくれますね」……

墨で書かれた達筆な字が私の運命を決めたようだ。

その後、高校受験の私に丁寧な叱咤激励の手紙が彼から届き始めた。

翌年小津高校一年生になった私は、姉の下宿に同居、先輩の彼は三年生(二〇歳)。

親元を離れて、姉妹で生活する私をまるで保護者のように世話を焼いてくれた。

当時の私は、初めて見る信号機にも戸惑っていた。

(人は赤で止まって青で進む。じゃあ、車は何信号で進むのか。青で横断していても、時々車が曲がって通る。真ん中の電車は何色で走るのか。こりゃあ難しい。そうだ、みんなと

一緒に渡ればいいんだ」

私の育った環境は、どちらを向いても視界は山と川だった。

## 筆山の思ひ出

「妹さんを、筆山ひつざんへ連れて行ってあげたいと思うけど、かまん（よろしい）かねえ」

彼は、最初のうちは、姉の了解を得ていた。

筆山（標高約一〇〇メートル）の登り口の階段を上がると、「ここに、土佐の初代藩主・山内一豊かつとよ以後、歴代の殿様の墓がある。一豊の妻の千代さんは、……」ここでも、彼の歴史の授業が始まる。

そして、必ず坂本龍馬の話に続き、維新の志士しで盛り上がる。私は、この人と坂本龍馬はどういう関係なんだろうと考えた。頂上からの景色は、高知市を一望する最高の眺め。

展望台の欄干に身をゆだね、遠くを見つめ、彼はゆっくりと話した。

「僕は、正月元旦に龍馬さんに会いに行く。朝暗いうちに家を出て、走って桂浜に向かう

……そして龍馬さんに新年の挨拶をして、龍馬さんと一緒に初日の出を拜む。太平洋から、真つ赤な太陽が、水平線に顔を出した時、それは、もう最高！……僕の一年は、毎年、桂浜から始まるんだよ」笑みが光った。

「私も行きたい！ 来年のお正月には私も連れてって」もう、絶対行く気になっている。

「それは、いかん。女の子を朝暗いうちから、連れて行かれん」

「どうして、暗い時は行かれんの？ 私、暗かっても平気よ」

「世間では、男と女が暗い所へ行かれん。そうなっちゅう（なっている）」

「ふん？」

五月に入ると彼は、「僕は、来年東京の大学を受けたいと思っている。君も高知に慣れたと思うから……何か困ったことがあったら、なんでも相談に乗るからね。学校で、いつでも言つて来たらいい。僕は、君を妹だと思つているから……」と言つた。

（生徒会長つて大変なんだなあ。執行部員の、弟や妹のみんなの面倒を見ているのだ）  
この頃の私は、大人はみんな優しい、そういう環境に育つたのだ。

夏休みは、毎朝七時、筆山の登り口で待ち合わせて、二人で山へ駆け上る。

時間厳守である。彼は難関の大学を目指す受験生なのだ。私は、大学といえど東大しか

知らなかった……話になるわけがない。

頂上では、高知市の説明から始まって、詩集や歴史の話、そして、腹筋、雑談など。

芝生の上をゴロゴロ転がって競争する。

突然「大政奉還は？」「徳川慶喜イヤダロウナ、1867年」

「ピンポン正解！」と言われてはしゃぎ、天真爛漫らんまんを絵に描いたような二人の時間が流れていた。

観光客や散歩する人たちは、私たちが奇異に見えたのか、よく声をかけられた。

彼は、いつも「はい、妹です！」の後、私を見て悪戯いたずらっぽく目で笑った。

(……また、ウソついちゃった)

展望台の丘では、お互いの夢を……と、いうより勝手に私がおしゃべりをする。

「私ね、小学時代は『琴姫七変化』の松山容子さんに憧れたの。いつもは、お城のお姫さま、ある時は正義の味方のかっこいいお侍さん。歌も大好きなの……聴いてくださる？」

さっと、立ち上がり身振り手振り、琴姫さんになりきって歌った。

♪花を摘む手に刀が似合う

城のすずめがそう言うた

揺れるかんざし琴姫さんよ

そよそよそよ 花も散る散る

え〜えええ七変化

……「おおうまい、うまい」と拍手してくれた。

私はますます、調子に乗った。

「私ね、中学二年の時、私が脚本書いて発表会で劇をやったの。その時、どこかのマスクミの方が見ていて、私をスカウトしてくれたらしいの。私は、後で聞いたんだけど……校長先生や担任の先生と両親とで話し合ったらいいのね。『東京は怖い所だから、まだ右も左も分からん文には、無理……危ない。高校を卒業してから芸能界に入ったらどうか』って、言ってくれたの。だから、高校卒業したら、私は女優さんになるの。

いろんな人生を、演じられるから、面白いでしょ。私を見る夢は、いつも撮影ロケの現場なの。私ね、夢で見たことや、ふと思ったことが、どうしてか、現実になるの。今は卓球大会で、県下優勝が目標だから……ふふふ」

彼は目を細めた。

彼の大好きな歌は「故郷の花はいつでも赤い」。

♪この土手道は、自転車で

いつも学校へ行った道

ひばりも鳴いた ススキも揺れた

あの娘こが休むと寂さびしめてならず

学校が その日は遠かった 遠かった

何の話をしていたのか……たわいない二人の時間は楽しかった。

鏡川の土手に沿って歩く。彼は「月に一回は、会おうか」とか、「三〇分だけだったら、勉強に差し支えない」とか、いつも時間限定であった。

「ここが、龍馬さんが通った道場があった所」……彼は両手を上に挙げ、剣道の素振りの格好をして、ここでも坂本龍馬を語る。

川縁かわべりの忠霊塔を見つけると、「ここにあつたのか……」と、勇んで裏の難しい人名を読み上げる。そして戦争の歴史などを話してくれる。この時の私は、昔のことなどどうでもよかった。

ただ、彼の真剣な眼差しまなざしを（いいな）と感じていた。要するに「中田君は歴史と墓が好きなんだ」ということだけは、わかった。……デートコースには、常にコケが生えた墓

があった。

勉強も教えてもらい、期末の通知票は、跳びながら彼の教室に持って行く。

「よう、頑張ったねえ。えらい、えらい」頭を撫でて、褒めてくれた。

## 二人の高校時代

当時の授業は、生徒たちが指定の教室へ毎回移動しての授業であった。

彼の「時間割り表」は、ちゃんと調べていた。何かと便利である。移動中に、階段や廊下で必ず出会うことになっている。

彼は、友人のT君と一緒に、私は、Yちゃんと必ず一緒。

「おはようさん。この本を読んでごらん。今、話題の本だから」と、『愛と死を見つめて』や、『受験時代』『オリnposの果実』などを手渡してくれた。

時おり、本の中のしおりに彼の短歌もあった。ある日のしおりには、

世の中の明るさのみを吸ふごとき 黒き瞳の今も目にあり（啄木）  
と墨で上手に書かれていた。

（もしかして、私のこと？ ふん。中田君はよっぽど、姉ちゃんが好きなんだ。これほどまで妹の私に親切にしてくれるとは……）女の勘だった。

「ああ、また忘れた、書道の道具。中田君に借りる。Yちゃん一緒に行つて」  
書道の授業は姉も彼と一緒にだったが、姉に頼んでも答えは分かっている。

「どうして忘れたの？」と言うはず。

姉は、書道家のように、字が上手で、筆へのこだわりは、大変なもの。

書道教室の廊下の窓から、ピョコピョコ顔を出して「おる、おる」と確認して入って行った。

「中田君、書道の道具忘れました。貸してください」と言うつまんざら嫌でもなさそうだが、「また、忘れたの？ 困りますねえ」やっぱり、校長先生の口調だった。姉は、ニヤリとしてこちらを見た。

彼は、Yちゃんに「こんにちは。いつも仲良くしてくれて、ありがとう」と声をかけた。一週間後、「あつ、お昼のパン代忘れた……中田君に借りに行く。Yちゃん一緒に行こう」いつもYちゃんの手を引いて、チョコチョコと三年生の教室を覗く。ワクワク、ドキドキのこの興奮がたまらなく好きだった。

「中田君、パン代忘れしました。貸してください」

「また忘れたの？ 女の子は自分でお弁当を作って持って来ないといけませんよ」  
彼の細い目が笑っていた。

ある日曜日、彼は大きな機械を抱きかかえて、私たちの下宿に来たらしい。  
階下の玄関で姉と姉の友人のSちゃんが話している。

しばらくして姉たちが、その機械を部屋に運び込む。

「会長が、録音機を持って来てくれた。この機械で声を録音して聞けると言うた。やってみよう……けんど、会長は、ひどいでねえ。『妹さんに、見せちゃって』だって。いっつも、『妹さん、妹さん』ばかり。私らあのことは、頭のないみたい」

時折、ウチの下宿で泊まって行くSちゃんは、「私は中田君が好き……けんど、私には優しくしてくれん。文はえいことよ」といつも決まって姉に愚痴っていた。

その頃の私は、誰が誰を好きでも、どうでもよかった。

またある日、姉たちが妙なことを言った。

「文よ、中田君と付き合うのはいいけど、結婚だけは止めちよきよ（止めときなよ）。あの

人は難しい人だから、女性の気持ちは全然分からん人やきね。苦勞するき。分かった？」  
(付き合おうって何？ 結婚ってなんじゃろう？ 苦勞？) 私には何も分からなかった。

高校生活にも慣れてきた頃、彼から「特ダネ情報」を耳にした。

小津高校の先輩のN氏が、自転車で日本一周をして、五日後高知に入り母校に寄るという。

その先輩の『高校生活の眼』という本を、中学時代に、彼から貸りて読んでいた。

私も、ファンレターを出した憧れの先輩である。

彼の話のおおかたは、龍馬とこの先輩の話であった。

「当時の荒れた小津高校で生徒会長を二期も務め、現在の小津高校に作りあげた人……僕が最も尊敬している先輩でね……炭を焼いてお金を貯めて、二年遅れで高校に入学。

土佐山から徒歩、往復六時間の通学。在学中の先輩は、夜中まで学校のトイレや壁のらくがきを独りで消したそう。当時の学校は、政治的な影響もあって、いろいろ苦勞したみたい。僕はその頃、体調も良くなり、高校で剣道をやりたいと思ひ、川添先生に、こしやんと(ひどく)しごかれゆう時じやった。そのN氏に、後継の会長役を頼まれ、断り切れずに君の姉さんと一緒に生徒会をやらしてもらったわけ。あの先輩に目を付けられたら

絶対逃げれん。毎日説得されたきねえ。これは、しわい（しつこい）人。まゝおかげで君と出会ったけどね……はっはっはっ」

「おお〜ビッグ・ニュース！」

五日後の三時半、Yちゃんを誘い、学校の屋上に上がった。南東に高知城の天守閣がそびえ、遠く南に筆山が見える。北西下には歴史を語る開成門。

すぐ下の玄関前の広場に、あの本の著者のN氏と西村校長先生、そして彼の姿があった。

「うわあ〜すごい！ Yちゃん、みて見て。すごい、すごい」

N氏は、自転車に大きな荷物を乗せ、登山帽を被り、自転車のハンドルを握り締めたまま話をしていた。その様子を取材カメラマンが追っている。

私たちは屋上から、世界一周のマゼラン<sup>g</sup>を見るような興奮で、こんな会話をしていた。

「Yちゃん、あの先輩のNさんは坂本龍馬のような人だつて。中田君が話してくれた。なんぼか（どれほどか）、出世するろうねえ」得意になって話す私。

すると、Yちゃんが「私は、中田君も出世すると思うよ」

一五歳の私たち少女が、まさかこの二人の妻となり、人生の固い絆で結ばれることになるうとは……。

不思議な出合いの始まりだった。

ある日の放課後、卓球クラブのトレーニング中に、彼の姿を見つけて飛んで行った。半袖の赤いユニホームに、グレーのショートパンツ姿の私。

「中田くん。ハァハァ……あのね、私のクラスに舟木一夫がいるの。そう！ そっくりなの。かっこいい男の子よ。今度紹介してあげるさね」

「そう、よかったねえ……なかなか頑張って走りゆうねえ（走っているね）」

「うん、じゃ、またね」

当時の小津高校の男子卓球部は県下最強チーム。キャプテンの配慮で、私を時々男子チームで練習させてくれた。「二年は学校の周り一〇周走る！」名キャプテンS君の号令である。みんな、うんざり顔。

私は（部員数を絞り込むための苦肉の策だな）と分かった。

なんと、新入生一五〇名、卓球台は男女で二台、そして隣のバスケット部（県下最強チーム）の練習場へピンポン球が転がり、どうにもならない状態だった。卓球部の環境の悪さに、情けない思いで、猛ダッシュして先頭を走った。校舎の角、後ろに誰も見えない瞬間、小津高校の西門前のYちゃんの下宿に飛び込んだ。休憩……Yちゃんとお菓子を食べ

ながらのおしゃべりタイム……誠にいい場所に、彼女は住んでいたのである。

……三月、楽しかった一年が過ぎ、いよいよ「別れの日」が、近づいていた。

私の教室の席から小津高校の玄関がよく見えた。というより、この席を選んでYちゃんと座った。

毎朝、本鈴のベルと共に、彼は自転車漕いで学校へ滑り込む。その姿を見たくて、三階の教室の窓から、いつも外を眺めていた。

「あっ、来た、来た。Yちゃん、校長先生」は、今日も滑り込みセーフ。ホント、ギリギリが好きなんじゃねえ。信号が赤だったら遅刻よ。どんな計算でチャイムと同時に校門に着くのか、不思議やねえ」

二人で笑った。そうか？ 明日から、その姿が見えなくなるのか……。

## 別れの日

最後の日。小津高校の玄関で待ち合わせ、思い出の場所を二人で歩くことになった。

もう時間を気にすることはない。彼の大学受験も終わり開放感で弾んでいた。

# 途中省略

続きは製品版にてお読みください。

## 著者プロフィール

### 中田 文 (なかた ふみ)

昭和23年 高知県に生まれる。  
昭和42年 高知県立高知小津高校卒業。  
翌年結婚 (主人は学生)。

男児4人の子育てに奮闘。わが子の「成長過程の“今”を切り取る」をテーマにビデオ制作、コンテストに出品。

昭和60年 『たっ君は店長さん』全日本ビデオコンテスト大賞 (女性初) 受賞、翌年『ぼくの勉強部屋』東京ビデオフェスティバル (プロ・アマ24ヶ国出品) 手塚治虫賞受賞。その後も、数々のコンテストに入賞。

昭和61年 ビデオ制作会社を設立。親族の介護をしながら、「ビデオとオモシロ子育て」の講演活動。自宅では、青少年、お母さん方の「悩み相談」を受けている。

平成2年 『果てしないロマンを求めて!』高知県警察機関誌 (月刊) に1年間連載・四国管区警察局優秀作品賞受賞。

平成24年 坂本龍馬財団設立に参加、“今、なぜ龍馬なのか”を学ぶ。



題字／竹内暮雪 (土佐郎)

カバーイラスト／中田優

## 恋文 おまんが好きぜよ!

2013年 10月15日 電子書籍版発行

著 者 中田 文

発行者 瓜谷 綱延

発行所 株式会社 文芸社

〒160-0022 東京都新宿区新宿1-10-1

電話 03-5369-3060 (編集)

03-5369-2299 (販売)

<http://www.boon-gate.com>

©Fumi Nakata 2013 Coded in Japan

ISBN978-4-286-14133-6

JASRAC 出 1307601 - 301

●本作品の全部または一部を複製、編集、修正、変更、頒布、貸与、公衆送信、翻案、配布する等の著作権及び著作者人格権侵害となる行為、および有償・無償に関わらず、本データを第三者に譲渡することは禁止いたします。